平成 25 年度　学位（課程博士）申請論文

バクトリア史研究

（要旨）

龍谷大学大学院文学研究科
宮本　亮一

序論

本論は，近年相次いで発見されたバクトリア語資料を考察の中心に据え，さらには漢文資料，ペルシア語やアラビア語で書かれたイスラーム資料，現地出土の碑文なども幅広く用い，バクトリアを中心に展開した諸民族の歴史，及びバクトリアの歴史地理，社会の解明を目指すものである．

近年，古代中央アジア史に関わる重要な資料の発見が相次いでおり，1990 年代初頭にマーケットに現れ，世に知られるところとなった 150 点を越えるバクトリア語文書は質・量共にその代表的なものと言える．これらの文書は N. Sims-Williams によって解読され，2012 年には，全点のテクスト，翻訳，写真版の刊行が終了し，研究は新たな段階へと進むことになった．そして，これらが刊行されたことにより，古代中央アジアの歴史に関心を持つ者が，この資料を容易に利用することができるようになった．本論は一連の文書群を中心に，広くバクトリア語資料を利用するという点で，国の内外を問わず他に類を見ない新たな試みであると言える．

本論が扱う中央アジア，とりわけイスラーム化以前，パミール高原以西の中央アジアは，かつて日本人研究者が積極的に研究対象とした地域の 1 つであった．しかし，資料の零細さなどから最近はこのテーマに取り組む研究者，特に若い世代の研究者は非常に少なく，盛んに研究が行われているヨーロッパの状況とは対照的である．本論はこのような状況を打開するための叩き台を提供することをも目的としている．

まずは，「序論」にて「バクトリア」なる地名が指し示す範囲の定義付けを行う．この地名が資料に初めて登場するのは，アケメネス朝のダレイオス 1 世（前 552~486）の碑文である．バクトリアはアケメネス朝の東方領域における 1 つの dahyu「州」であったが，ダレイオスの碑文に見えるバクトリアという地名が指し示す範囲を正確に知ることは難しい．その後，アケメネス朝を滅ぼしたアレクサンドロス大王（前 356~323）は，その東方遠征の途上バクトリアへ到来し，オクサス川（アム・ダリア）を越え，ソグドにまで到達する．アレクサンドロス大王の事績を伝える諸文献によれば，バクトリアの北限はアム・ダリア，その南限はヒンドゥー・クシュ山脈とある．

その後，この地名は用いられなくなり，この地は北方から侵入した遊牧民族トハロイ（Τόχαροι）に由来すると思われる「トハラ」「トハーリスターン」の名で呼ばれるようになる．漢文資料に見える大夏，吐火羅，睹貨邏などは，このトハラの音写であると考えられている．前 129 年頃，中央アジアに到着した張騫の報告に基づく『史記』大宛伝には，嬀水（アム・ダリア）の南側が大夏，即ちトハラであったとある．しかし，その後，この地名が吐呼羅として再び『魏書』に登場すると，それはアム・ダリア以北の地を含むようになり，玄奘の記す睹貨邏の範囲もこれと同じである．

一方，7 世紀後半以降この地に向かって勢力を進めたムスリムの手になるペルシア語やアラビア語の資料には，トハーリスターンという地名が現れ，その地名は基本的にバルフ以東，アム・ダリア以南の地を指し，アム・ダリア以北の地は含まれない．

また，土器組成の比較に基づいた考古学的研究によれば，3 世紀後半頃から 8 世紀前半頃まで，アム・ダリアの南北で共通の土器が出土し，その形状の変遷も南北で概ね一致し，漢文資料に見える吐呼羅や覩貨邏がアム・ダリアの北側をもその範囲内に含んでいる状況

と一致する．また，ヒンドゥー・クシュ山脈南北については，幾つかの共通点は見られるものの，山脈の南北で出土する土器は基本的に異なり，両地域が異なる生活文化圏であったことが明らかになっている．

これらの状況を踏まえた上で，本論の考察対象となる時代が，クシャーン朝期以降から初期イスラーム時代までであることを考慮に入れ，本論で「バクトリア」という場合，アム・ダリア以北の地をも含む呼称としてそれを用いる．

第 1 章　バクトリア語とその資料

第 1 節「バクトリア語概観」では，バクトリア語という言語について，その文字や文法を概観する．バクトリア語は，ソグド語，コータン語，コレズム語と同じく，インド・ヨーロッパ語族，イラン語派，中世語の東方言に属する言語である．中世イラン語の多く（中期ペルシア語，パルティア語，ソグド語，コレズム語）はアラム文字に由来する文字で表記され，右から左に書かれるが，バクトリア語はギリシア文字を用いて左から右に記される．これは，アレクサンドロスの東征以降，この地がギリシア人の支配下に入ったことで，ギリシア文字，ギリシア語の使用が定着したことに由来し，クシャーン朝などの非ギリシア系の諸勢力が勃興しギリシア語の使用が廃れた後も，在地の言語を表わすために文字の使用は継続した．バクトリア語では，ギリシア語で通常用いられる 24 のアルファベットに加え，ギリシア語には無い音 š[sh]を表わすために，ショーと呼ばれる文字（þ）が加えられている．クシャーン朝期の碑文は Monumental Script と呼ばれる楷書体で記されているが，その後文字は徐々に草書化してゆき，4 世紀以降の文書は全て草書体で書かれている．

バクトリア語の名詞活用は，古代イラン語の複雑な活用語尾を保持している他の東イラン語と比べると，極めて簡素化しており，直格と斜格，単数と複数の区別しかない．さらに，これらの活用も，クシャーン朝期以降は区別を失ってゆき，最終的には特定の語尾によって複数形の単語を見分けることができるだけになる．代名詞，形容詞，副詞，前置詞，接続詞などは，一連のバクトリア語文書の出現により多くの語が知られるようになった．

動詞の活用も，文書群の発見により，多くの形が回収された．バクトリア語の動詞には，他の中世イラン語と同じく，現在語幹と過去語幹がある．これらはそれぞれ古代イラン語の現在語幹，および過去分詞に由来する．現在語幹に基づく活用は，直接法（indicative），接続法（subjunctive），希求法（optative），命令法（imperative）などの法があり，過去語幹に基づく活用も同様に，直接法，接続法，希求法などの形が知られている．また，この他にも，完了形や過去完了形，分詞，不定詞などの存在も知られている．

第 2 節「バクトリア語資料概観」では，この言語で書かれた種々の資料について，碑文と文書に大別した上で概説する．現存するバクトリア語資料の中で最も古いものは，ガズニーの西方，カラバーイ山の頂上付近にある巨石に刻まれたダシュテ・ナーウール碑文であり，そこにはクシャーン朝の 2 代王ヴィマ・タクトゥ（カニシュカの祖父）の名が見える．碑文に見える紀年は 104/5 年に当たると考えられている．クシャーン朝期の資料には，この他に，カニシュカの事跡を記したラバータク碑文，王朝の高官による神殿建立について記したスルフ・コタル碑文などがある．また，最近になって，ソコトラ島の洞窟から，ブラーフミー文字やカローシュティー文字などで記された大量の碑文が発見され，その中

に 1 点，バクトリア語の碑文が存在することが明らかになった．クシャーン朝期以降の資料では，インダス川上流域で発見された数点の碑文，バーミヤーンの西方ヤカウラング近郊で発見されたタンゲ・サフェーダク碑文，パキスタンの西北部，アフガニスタンとの国境近くのトーチ渓谷で発見されたトーチ渓谷碑文などがある．最後の資料は 9 世紀中頃のものであり，現存するバクトリア語資料の中では最も新しいものである．その他，貨幣，印章類，銀器に刻まれた銘文も存在する．

文書は，先述した 150 点を超えるバクトリア語文書群が中心となり，それらは契約文書と手紙が大部分を占める．また，数点の仏教関係文書，1 点のマニ文字で書かれた文書が存在する．

第 2 章　クシャーン朝の歴史的展開

第 2 章では，漢文資料，バクトリア語資料，及びサンスクリット語などのインド系言語で書かれた資料を用い，クシャーン朝の歴史的展開について論じる．第 1 節「漢文資料から見たクシャーン朝の展開」では，漢文資料に見られる王朝の展開に関る情報を整理する．クシャーン朝勃興の記述は『後漢書』西域伝大月氏国条に見える．そこには，大月氏の五翕侯の 1 人である丘就卻（クジュラ・カドフィセス）が他の四翕侯を滅ぼして王朝を興し，領土を拡大したこと，さらにクジュラ・カドフィセスを継いだ閻膏珍（ヴィマ・タクトゥ）がさらに領土を拡大したことが記されている．この記述を，『後漢書』西域伝に記された他の国の記述や，『三国志』の記述などと照合し分析すれば，クシャーン朝が，初代王丘就卻（クジュラ・カドフィセス）の治世に広義のガンダーラ（罽賓）までその勢力を拡大したこと，2 代目閻膏珍（ヴィマ・タクトゥ）の治世にはその領域がインダス川流域（天竺）にまで及んだことが判明する．また，これらの王朝の展開に関する理解とは別に，漢文資料からは，王朝支配下のインダス川流域で，間接統治が行われていたことも判明する．また，漢文資料からは，インド方面への展開とは別に，1 世紀の後半には，王朝がパミール高原を越えてタリム盆地へと侵入していたことが分かる．

次に，第 2 節「碑文資料から見たクシャーン朝の展開」では，漢文資料から得られた情報を踏まえつつ，バクトリア語やサンスクリット語の碑文に基づき，クシャーン朝の展開を考察する．まず，王朝の初代王クジュラ・カドフィセスである．パキスタン北部のスワートから出土したガンダーラ語の碑文には，クジュラ・カドフィセスの名が見え，当碑文の寄進者であるスワートの王の称号（王 raya）よりも高位と思われる称号（大王，諸王の王 maharaja rayatiraya）を有していることから，クシャーン朝の勢力がスワートに及んでいたと考えることができる．漢文資料からはこの王が罽賓（広義のガンダーラ）を征服したことが知られており，ガンダーラ語の碑文は漢文資料の記述を裏付けることになる．また，これ以外にも，タキシラやマトゥラーから出土した碑文により，クジュラ・カドフィセスのガンダーラにおける活動を確認することができる．

クジュラ・カドフィセスを継いだヴィマ・タクトゥは，マトゥラーから出土した碑文にその名が見え，王朝の勢力がガンジス川流域にまで及んでいたことが分かる．また，前章で述べた現存する最も古いバクトリア語資料であるダシュテ・ナーウール碑文にもこの王の名前が見え，ガズニー方面へ王朝の勢力が展開していた可能性がある．3 代目王ヴィマ・

カドフィセスの動向を示す碑文も数点存在するが，この王の治世における領域の拡大は見られない．

続くカニシュカは漢語仏典などにその名を残していることから，クシャーン朝で最も有名な王である．カニシュカの事跡を伝える最も重要な資料は，バクトリア語で書かれたラバータク碑文であり，碑文には王朝の勢力がガンジス川流域にまで及んでいたことが記されている．ラバータク碑文に王朝の勢力が及んだと記されている地名のうち，サーケタ，及びカウシャンビーに関しては，漢文資料やサンスクリット語碑文から，その事実を裏付けることができる．さらに，その他のサンスクリット語碑文からも，王朝の勢力がガンジス川中流域にまで及んでいたことを裏付けることができる．また，先の漢文資料と同様，これらの碑文資料からも王朝の支配形態を考察することができ，それが，王，その下に地方に配置された王族，さらにその下に王朝の侵入以前から存在した在地の勢力，という三層の構造であったことが分かる．

カニシュカの後継者であるフヴィシュカの治世は，有名なスルフ・コタル碑文が書かれた時代であるが，この碑文には王朝の展開に関わる情報は含まれていない．その他の資料からもこの王の治世における王朝の領域の拡大は見られないが，近年，この王に関る幾つかの注目すべき新資料が発見されている．Schøyen Collection 中の写本には，「大乗に向けて出発した Huveṣka という名の王」という文言が見え，「大乗に向けて出発した」という形容辞は，3～4 世紀頃のニヤ出土のガンダーラ語木簡，及びエンデレから出土したガンダーラ語の石刻銘文にも見える．また，新疆南部から出土したと伝えられる織物にもフヴィシュカが描かれていると考えられており，この王とタリム盆地との強い繋がりを伺わせる．

第 3 節「クシャーン朝の北，及び西への展開」では，クシャーン朝の領域のうち，従来ほとんど言及されてこなかった北限および西限について若干の考察を行う．北側については，バクトリアとソグドの間にあった鉄門に関する考古学的研究が参考になる．それによれば，鉄門には，前 3 世紀のグレコ・バクトリア王国時代に壁が築かれ，その後，1 世紀になってヘレニズム期の壁の上に新たに壁が作られた．発掘者この鉄門が，クシャーン朝とソグドとの境界の役割を果たしていたと考えている．西側に関しては，マニ教文献に手掛かりがある.マニによって東方に派遣されたマール･アンモーの動向を伝える文献には，アンモーがクシャーンの領域に入ったことを記すもの，またザンムやメルヴといった地名に言及するものが存在し，それらからクシャーン朝の西側の領域を推測することができ，それは恐らくメルヴにまでは及んでいなかったと思われる．

第 3 章　カダグスターンの事例から見たバクトリアの歴史地理

第 3 章は，バクトリアの歴史地理について扱う．ここで考察の対象となるのは，一連のバクトリア語文書が発見されたことにより知られることになったカダグスターン（καδαγοστανο）という地域である．第 1 節「カダグスターン/カダグ関係バクトリア語文書群」では，バクトリア語文書の中から，この地域と関連する文書を網羅的に挙げ，考察の土台を構築する．この地域に関連する文書は，「カダグの人々の王（καδαγανο þαο）」，「kadag-bid（καδαγοβιδο）」，そして「カダグスターン（καδαγοστανο）」という語に基づき大きく 3 つに分類することができる.それらの語が現れる文書に登場する人物と同一の人物，

あるいは親族関係にある人物が登場する別の文書もこの地域と関係する文書に含めることができる．

第 2 節「カダグスターンの起源」では，バクトリアにカダグスターンと呼ばれる地域が出現した契機を考察する．この問題を考察するための手がかりとなるのは，第 1 節で網羅的に挙げた文書のうち，380 年 Spandarmid 月（12 番目の月）の日付を持つ文書（Doc. cr）である．この日付に見える月名（Spandarmid）は中期ペルシア語であるが，同年 Drematigan 月（11 番目の月）の日付を持つ別の文書（Doc. C）は，その月名（Drematigan）がバクトリア語で表わされている．この月名表記のための言語の変化は，11 番目の月と 12 番目の月の間に何らかの政治的変化があったことを示唆しており，その変化がバクトリア語から中期ペルシア語であることを考えると，そこにサーサーン朝の影響を想定することが妥当と思われる．また，月名が中期ペルシア語に変化した文書（Doc. cr）は，バクトリア語文書中に kadag-bid の称号を帯びた人物が登場する最初の文書でもある．

4 世紀後半におけるバクトリアの状況を考察すれば，この政治的変化，及びカダグスターン出現の筋書きを想定することができる. 4 世紀後半, バクトリアの西方のイランでは，シャープール 2 世（309~379）のもとサーサーン朝が最盛期をむかえており，この王の治世に王朝の東方領域にはキオニタエなどの幾つかの民族が侵入してきた．また，この後，キダーラやエフタルといった所謂フン系民族が相次いで勃興する．サーサーン朝はこれらの勢力と争い，その後，北部アフガニスタンを支配し，この地域を管轄するために kadag-bid という官職を導入し，最終的にこの kadag-bid が管轄する地域が「カダグスターン」と呼ばれるようになった，という筋書きを想定することができる．また，月名の変化という暦制度の改変は，シャープール 2 世の後継者であるアルダシール 2 世の登位に合わせて行われたのかもしれない．

バクトリア語文書中には 4 世紀後半から 8 世紀後半まで，この地域に関連する文書が存在するにも関らず，漢文資料やイスラーム時代の資料には，この地名を見出すことができない．この事実は，カダグスターンという地域が，地理書や史書に記載されるような地理的区分ではなかったという可能性を示唆しているように見える．第 3 節「カダグスターンの所在地」では，カダグスターンの所在地について，3 つの可能性について考察する．

F. Grenet は，カダグスターンに言及する文書に現れる Warlu という地名に注目し，この地名を漢文資料に見える活路に比定した吉田豊の説，及び桑山正進によって研究されていた活路の位置に関する情報を手掛かりとし，北部アフガニスタンのバグラーン・ゴーリー平原にカダグスターンの所在地を求めている．次に，Grenet が利用したものとは異なる文書（Doc. F）に基づけば，カダグスターンの所在地をバグラーン・ゴーリー平原よりも北方にあるクンドゥズ平原に求め得る可能性を指摘することができる．さらに，新出のサンスクリット語銅板銘文を利用すれば，その所在地をクンドゥズの東方ターラカーンに求め得る可能性を指摘することができる．Grenet の説を含め，カダグスターンの所在地に関わるこれら 3 つの説を検討すると，それぞれの説に説得的な点と問題点の双方を挙げることができ，決定的な見解を提示することが難しい．しかし，それらの点を考慮に入れても，次の 3 つの可能性，即ちバクトリア語文書中でカダグスターンと呼ばれる地域が広くスルハーブ流域を指した可能性，時代毎にその地名が示す範囲が変化した可能性，そしてその地名が次第に象徴的なものへと変化した可能性を指摘することができる．

第 4 章　バクトリアの社会

最後に，第 4 章ではバクトリアの社会について考察する．第 3 章で扱った地名と同様，一連のバクトリア語文書が発見されたことにより，これまで全く知られていなかった当時の社会の様子が明らかになった．まず第 1 節「地理的区域」では，バクトリアにおける地理的な区域について検討する．文書には，町，地区，城砦，街区といった語が現れる．これらのうち，「町」と「地区」は，その使用に時期的な差異があるものの，その指示対象は基本的に同じであったと考えることができる．そして，「城砦」と「街区」は，「町」或いは「地区」の中に存在したと考えられるが，「村」については在証例が少なく詳細は分からない．

次に，第 2 節「社会構造」では，バクトリアにおける社会構造について考察する．バクトリアには「khār（χαρο）」と呼ばれる在地の支配者がいた．khār が帯びた称号を検討すると，この在地の支配者は当地を支配下に置いた勢力の変遷に合わせて，その都度異なる称号を帯びていたことが分かる．また，「khār の一族」という，khār と密接な関係にあったと思われる人々も存在した．「khār の一族」のうち数人は，「城砦長（λιζοβιδο）」という称号を帯び，Rōb の外で活動していたという共通性が見られる．しかし，khār の一族には，城砦長以外の異なる称号を帯びる人物もおり，この人々全てに共通する特徴を見いだすことはできない．

「khār」や「khār の一族」に関係する文書には，「執務官（φρομαλαρο）」「書記（λαβιρο）」「hostig（υοστιγ）」という称号を帯びる人物も登場する．これらの称号については，在証例が少なく，網羅的に事例を検証しても，具体的な職掌などはほとんど解明することができず，判明する事実はごく僅かである．「執務官」は，Rōb の khār の命令で活動していた可能性があり，また税の徴収を行っていたようである．「書記」については，その詳細はほとんど判明しない．しかし，社会構造の問題とは別に，書記には興味深い点がある．バクトリア語文書とスルフ・コタル碑文には，共通する記号のようなものが現れ，またこの記号が現れる箇所の文章も類似している．これは，恐らく書記が共通して用いた記号であったと思われ，バクトリア語文書に見えるこの記号が最初期の文書にしか現れないことから，この記号を文書の年代を示す指標と考えることができる．「hostig」については，文書の封印に関係する職掌を有していた可能性を指摘することができる．また，本節では，サーサーン朝の支配によってバクトリアに導入されたと思われる幾つかの称号についても検討する．

第 3 節「社会習慣」では，バクトリアで行われていた幾つかの習慣について検討する．まず，土地に関わる事例を示す．土地の譲渡，購入，賃貸に関わる契約文書には，契約の対象となる土地の四至が明記されていることが多い．このような記載がある文書の年代は，4 世紀後半から 8 世紀中頃にまで及んでおり，この間，継続してこの契約対象となる土地の四至を示すという習慣が行われていたことが分かる．次に，奴隷身分からの解放について考察する．バクトリア語文書群には奴隷に対する権利放棄の契約書が 1 点存在し，そこには奴隷が主人に一定額の金を支払えば，その身分から解放されることが記されている．そして，年代の離れた資料ではあるが，バクトリアで書かれたアラビア語文書にも，同様

に金銭を支払うことによって奴隷身分から解放される事例があることから，バクトリアにおける奴隷は，金銭の支払いによってその身分から解放され得る存在であったことが分かる．最後に，婚姻の習慣について．バクトリア語文書には，1 点の婚姻契約書が存在し，そこには兄弟で 1 人の女性を妻とする，所謂一妻多夫の習慣が行われていたことが記されている．また，同じ文書には，婚姻に際して，新郎側ではなく，新婦側が財産を持参していたことを示す記載がある．同様の習慣がアラビア語文書にも見られることから，これがバクトリアで長期にわたって行われていた習慣であることが分かる．